

きゅうび 九尾のきつね

むかし、ひとりの旅人が、道ばたで小便^{しょうべん}をしながらふと下を見ると、白い骨^{ほね}が落ちていました。小便が、骨にかかるつていました。旅人は、ふざけて、「つめたいか」とききました。すると、骨が、

「つめたい」と答えました。

「温かいか」ときくと、

「温かい」と答えます。旅人は気味が悪くなつて、急いでそこをたち去りました。すると、骨があとからついてきます。旅人はおそろしくなつて、村の酒屋まで来ると骨にいました。

「ちよつとここで待つていてくれ。酒を買って飲ませてやるから」

旅人は、骨をそこに待たせておいて酒屋に入り、裏口^{うらぐち}からにげてしましました。

何年かたつたある日のこと、旅人は、またあの酒屋の前を通りかかりました。すると、酒屋のむかいに新しい酒屋ができていて、美しい女が酒を売っていました。旅人は、そこへ入つていって酒を飲みながら、

「何年か前、この店の立つているちよつとこの場所で、みような骨をだましてにげた」とがあるんだ」と話しました。

女は、

「ああ、おまえだったのか。その骨はわたしだよ。今までおまえを待つていたんだ」というと、たちまち九尾のきつねになり、旅人にはびかかって食つてしまいました。

骨に小便などひつかけるものではないというおはなし。

* 九尾のきつね しつぽが九本あるきつね。
妖怪^{ようか}

出典『語りの森昔話集1おんちよろちよろ』村上郁再話

原話『朝鮮民謡集』孫晋泰／郷土研究社